

感染症と哲学

Infectious Diseases and Philosophy

成城大学文芸学部教授

村瀬 鋼 MURASE Ko

はじめに

新型コロナウイルス感染症の世界的流行に苦しむ現代、「感染症」という事象について、理系・文系を問わず様々な視点、様々な角度からすでにたくさんの考察が提出されてきています。いずれも極めてアクチュアルな性格を持つこれら諸々の考察の傍らにあって、私はここで、時代から相対的に距離を置きつつ、「哲学」の立場からの一つのささやかな考察を試みてみたいと思います¹⁾。

最初に、フランスの哲学者として一般的にも有名なパスカル (Blaise Pascal, 1623-62) の言葉を引いておきましょう。

人間は一茎の葦にすぎない。それは自然界で最も弱いものである。だが、それは考える葦である。彼をおしつぶすのに、宇宙全体が武装するにはおよばない。彼を殺すには、ちょっとした靄、一滴の水で足りる。だが、たとえ宇宙が彼をおしつぶすときですら、人間は、人間を殺すものよりもずっと高貴であるだろう。なぜなら、人間は、自分が死ぬということを知っているからである。宇宙の方は、自分が人間に対して保っている優位について、何も知らないのに。

だから、われわれの全尊厳は思考のうちに

ある。われわれはそこからこそ立ち上がらねばならないのであって、空間と持続からではないのだ。だからよく考えるよう努めよう。ここにこそ道徳の原理がある。(パスカル『パンセ』Lafuma 版 200, Brunshvicg 版 347)

いわゆる「考える葦」についての有名な文章です。示したのは翻訳ですが、自然界の一員としての人間の脆さと、考えるものとしての人間の尊厳について述べられた名文です。このなかで、「ちょっとした靄、一滴の水」というところに注目してください。この「靄」のもともとのフランス語 *vapeur* は、当時、ペストの原因と考えられていた「瘴気 (腐敗物から発生する有毒ガス)」を意味する言葉でもありました。ヨーロッパは14世紀以来、ペストの流行に繰り返し襲われていますが、パスカルの時代にもフランスやスペインで大規模な流行がありました。パスカルは、自身、病弱な人でもありましたが、この「考える葦」についての文章を書きつける際、ペストに襲われて人々が大量に死んでいく現実の状況を念頭に置いていたことはまちがいありません。

さて、ペストとはいろいろな点で異なっているものの、やはり危険な感染症が世界中に広がっているこの現代において、「われわれはそこからこそ立ち上がらねばならない」と語るこのパスカ

ルの言葉に若干の励ましを得て、私たちも少しだけ「よく考えるよう努め」てみましょう。

1. 「身体」と「心」

新型コロナウイルス感染症が私たちに思い知らせたこと、それはまず、私たちが身体を持っているということ、そして私たちが身体において生きているということだと思います。何を当たり前のことを、そんなことは前から知っている、と言うかもしれませんが、当たり前のことを確認するのが哲学であり、また当たり前であるがゆえに普段は忘れてしまっている大切なことを思い出すのが哲学でもあるのです。

私たちは身体を持っていて、身体において生きている。これは実は、いましがた見たパスカルの「考える葦」についての文章が、まず注意を促していることです。「葦」とは、具体的には何よりも身体としての私たちの在り方のことを意味していると考えてよいでしょう。

身体を持つとは、一つには、それをを用いてこの世界のなかで私たちがさまざまなことをなすうるということを意味しています。その意味で、それは私たちの能動性を支えるものです。けれども、同時に身体は、私たちの受動性をも意味しています。身体は、一定の環境のなかでしか自分を維持することができず、環境からのさまざまな危険な働きかけにさらされています。一定の組成を持つ空気と水があり、穏やかに循環する気候の巡りがあり、多様な生き物たちを擁するエコロジカルな環境のなかで、仲間たちと衝突が少なくケアの多い関係性のなかで平和に共存する。そういった、身体としての私たちがめぐる様々な物事の中の（ほとんど奇跡的とでも言うべき）実に絶妙なバランスのなかでしか、私たちは生き延びることができません。いろいろなどころで言われているように、地球全体の平均気温がほんの数度あがるだけで、私たちの生活は壊滅状態に陥ります。そしてまさに、新型コロナウイルスのような「ちょっとした霧」によって、今、世界中が、さまざまなレベルで大混乱を来しているわけなのですが、こ

の大混乱の中心にあるものこそ、「自然界で最も弱い」「一茎の葦」とも言うべき、「身体」としての私たちの在り方である、と考えることができます。

けれども他方、私たちは、たんに「身体」であるのみではありません。パスカルは、「われわれの全尊厳は思考のうちにある」と言っていました。私たちは、葦は葦でも「考える」葦なのです。私たちは、脆い身体を持ち、そこにおいてしか生きることができず、そしてこの身体は、その平穏な存在を容易に損ないうる外界からの働きかけに受動的にさらけだされていますが、その身体のうち位置する私たちは、自ら考え、またこの身体そのものを私たちの能動性の手段として用いつつ、自分たちの状況を変えていく力を持ってもいるのです。

「考える」かぎりでの私たちの在り方は、「知性」と呼ぶのが適当ですが、私たちは、たんに（いわば「頭」で）「考える」だけではなく、（いわば「胸のなか」で）「思う」ことや（いわば「からだ」で）「感じる」ことをし、そういう営みが、たんなる物体としての身体ではない、「心」としての私たちの在り方をつくっています。そして実は、こうして考えたり思ったり感じたりすること、それこそが私たち自身であり、人間の人間としてのいわば本質です。実際、考えたり思ったり感じたりすることがなく、たんにタンパク質やカルシウムでできた物の塊が存在しているだけであれば、そこに人間がいると言うことはできません。そういう意味で、西洋哲学では昔から、人間の本质は、物体としての「身体」の方にはなく、「心」にこそあると考えられてきました。

このようにして、私たちは「心」と「身体」とを持つということ、そして「心」でありながら「身体」を持ち、その「身体」の在り方を「心」で気遣いながら生きるということ、これは、考えてみれば（考えてみる必要もないほど）当たり前のことなのですが、これは実は、コロナ禍を含めて私たちの多くの困難の源にある、私たちにとってきわめて基本的で重要な事実なのです。そして、「心」である私たちが、今まさに「考える葦」として、

この脆い「身体」としての自分たちの在り方をどう考えるのか、それが、コロナ禍にあって私たちに課せられている、哲学的に重要な一問題であると思われまふ。

この問題について考える材料として、ここでパスカルと同じ十七世紀のフランスの哲学者で、パスカルよりも二十数歳年長の、デカルト（René Descartes, 1596-1650）の考え方を参照してみたいと思います。なぜデカルトかと言うと、デカルトは、近代哲学と近代科学の父として、現代にいたるまでの西洋的世界のものの考え方の基本的な枠組みをいわばつくった人であり、その考え方を考えることは、私たちの時代の在り方を根底から考え直すことにつながりうるからです。尤も、デカルトが一切をつくったのだ、と思うのは早合点で、実際には近代と現代は実に多くの要素が複雑に絡み合ったものとして了解されるべきなのですが、さしあたりデカルトは、私たちの時代を眺めるときの、簡明で見通しの良い観点を与えてくれます。

2. デカルトと物心二元論

デカルトの言葉として一番有名なのは、皆さんもおそらくご存知の、「われ思う、ゆえにわれ在り（私は思う、だから私は在る）」（デカルト『方法叙説』）です。デカルトは、自分の一切の信念を疑い、いま自分が見ているものもいま自分が考えていることもすべて夢幻のようなもので、一切合切嘘っぱちなものかもしれない、と考へつめた末に、いや、一切が夢幻であったとしても、いま何ごとかを思っているこの私だけは、絶対確実に存在している、と結論づけます。さらにデカルトは、その「私」の存在の中身（つまり「本質」）は「思うこと」にある、と見て、「私とは思うものである」と言います（デカルト『省察』）。「思うもの」とは、いわゆる「心」のことで、考へたり思ったり感じたりしている私たち自身のことです。この「心」としての「私」の存在は、デカルト以降の近代哲学の基本的な立脚点となったので、デカルトは近代哲学の父と呼ばれるわけです。

他方、デカルトは、この「心」としての「私」

から出発して、今度は「物」としての「世界」を発見します。その論理は割愛しますが、つまりは、いったんは夢幻のようだと思われたけれども、よくよく考へてみたら、世界というものも、確かに存在していると言うべきであり、その在り方は「物」としての在り方だ、というわけです。「物」とは、つまり、感じたり思ったり考へたりする「心」とは無関係な純粋に物理学的な存在のことです。世界全体に見出された、この純粋に物理学的な在り方は、それ以降の近代科学の基本的な認識対象となり、またデカルトは、この対象を純粋に数理的に扱う方法（解析幾何学）をも発明したので、デカルトは実は近代科学の父でもあるのです。

このようにして、「心」と「物」とをきっぱりと区別した上で、この二つのものによってすべてを説明しようとする、このデカルトの考へ方は、「物心二元論」と呼ばれます。これはまた、感じたり思ったり考へたりする側に位置する認識する者、つまり「主体（ないし主観、英語では subject）」と、感じられたり思われたり考へられたりする側に位置する認識されるもの、つまり「客体（ないし客観、対象、英語では object）」とを区別して立てる考へ方でもあるので、「主客二元論」とも呼ばれます。

さて、この「物心二元論」は、一見、とても分かりやすくスッキリした物の見方であるかのように思われます。実際それは、近代哲学と近代科学との発展を導き、現代社会の、一見したところではデカルト以前に比較した場合の繁栄とも見えるものをもたらししました。けれども他方、それが抱え込んでいる難問というものもあり、それがまた、現代社会がその表面的な繁栄の影で露呈してもいる難題に結びついていもいるように思われます。

「物心二元論」が抱え込んでいる難問、それはこの枠組みでは捉えられないあるものの存在です。一切のものがそれで捉えられるはずのこの理論によって捉えられないこのものとは何でしょうか。それは、「物」と「心」とが一つになった状態で存在しているあるもの、つまり私たち人間自身のことです。私たちはなるほど「心」です。し

かしその「心」は、これとはまったく異質だと見える「物」と、つまり「身体」と密接に結びつき、いわば一体となっています。

実はデカルトは、この事実をはっきりと認めていました。デカルトは、一方では「物心二元論」に立脚して、「心」は「物」とは根本的に異なるゆえに、「物」なしでも存在しうる、ときっぱりと言い切りますが、他方では、具体的に、身体という「物」が傷つけば私自身がその傷ついた部位に痛みを感じるし、「感じる」とは「心」の事柄であるゆえに、「感覚」においては「心」と「物(身体)」とはすっかり一体になってしまっていると言わざるをえないこと、さらにはまた「脳」という「物」が「心」と特別な関係を持っているらしいことをも、明確に認め、この事態を「心身合一」という言葉で呼びました。デカルトは、「私」の本質を「心」とみなしつつも、「人間」としての「私」の現実が「心身合一」にあることを認めるのです。しかしそこで、「心身合一」の事実は、「物心二元論」という理論とは明らかに折り合いが悪いように思われるのですが、これをどう考えたらよいのでしょうか。

「心身合一」は、パスカルの「考える葦」が置かれている状況でもあります。そこで私たちの「尊厳」である「考える」力を発揮して、この状況をよく理解すべく務めることが肝心でしょう。

もっとも、パスカル自身はこの件に関しては最終的にはどうも悲観的だったようです。

われわれが一切の事象を精神と物体とで構成するのを見れば、この混合物〔＝心身で構成された人間自身のこと〕はわれわれにとってごく理解しやすいものだと誰でも思うだろう。にもかかわらず、これこそが最も理解しがたいものなのだ。人間は人間自身にとって自然界の最も驚異的な対象である。なぜなら人間は、物体が何であるのかがわからず、精神が何であるのかはもっとわからず、物体がどうやって精神と結合しうるのかは何よりいっそうわからないからだ。それこそが人間の諸困難の絶頂なのであり、それでいてそれ

が人間自身の存在なのだ。(パスカル『パンセ』Lafuma199- Brunschvicg72)

パスカルは結局、「考える」という知性の力で人間の「諸困難」を解決することは放棄し、最終的に、知性には依らず「心情」を通じた神への信仰に、「考える葦」としての人間の救済を委ねました。その神は、いわば「頭で考えられる」のではなく、「ハートで感じられる」のだとパスカルは考え、「頭で考える」ことしかない先哲格のデカルトの思考を厳しく批判しています。

けれども私たちとしては、さしあたりパスカルからは距離を置いて、デカルトの思考をもう少し追ってみたいと思います。

3. デカルトと心身合一

前節で見たように、デカルトは何より「物心二元論」の人なのですが、同時にまた「心身合一」の事実についてもあるしっかりした認識を持っていました。この両者の折り合いはどうなっているのでしょうか。

それについてのデカルトの見解最もよく教えてくれるのは、デカルトが、文通相手であったエリザベート王女(エリザベト・フォン・デア・プファルツ, 1618-80)に書いた手紙です。

エリザベートは、後に修道院長にもなったきわめて聡明な女性で、哲学の師であるデカルトに、物心二元論と心身合一の事実との折り合いに関して、説明を求める手紙を送りました。それに答えたデカルトの返信は非常に興味深いもので、全文を紹介したい思いに駆られますが、紙幅の都合上それは控えてまず要点を述べましょう。

デカルトは、「知性」(「想像力」がこれを補助する)によって「考えられる」べき事柄としての「物心二元論」と、「感覚」によって「感じられる」べき事柄としての「心身合一」とをきっぱりと分けます。そして前者を「学問」(つまり哲学と科学)によって理論的に追求されるべきもの、後者を「生活」(人間関係を含む)において実践的に学ばれるべきものとして位置づけます。デカルトの手紙

の最も重要な部分を引用します。

心は純粹知性によってしか理解されません。物体〔…〕は、やはり単独の知性によっても認識されますが、想像力に支援された知性による方が遙かによく認識されます。最後に、心身合一に属する諸事象は、単独の知性によっても想像力に支援された知性によっても曖昧にしか認識されませんが、感覚によって極めて明瞭に認識されます。〔…〕ひとは、省察〔＝哲学的探究のこと〕を控え、想像力を駆使する物事について研究すること〔＝科学的探究のこと〕も控えて、生活と日頃の交わりのみを用いることでこそ、心身合一を理解することを学ぶのです。(デカルト, エリザベート宛書簡, 1643年6月28日)

「心身合一」は、学問的な理論のレベルにおいて「知性」によってではなくて、「生活と日頃の交わり」において「感覚」によって知られる、というわけですが、これは具体的にはどのようなことなのでしょう。デカルト自身はあまり詳しく述べていないのですが、私の方で補って説明すれば、これは次のようなことです。

例えば、私たちは手を固いものにぶつけて、ぶつけた身体の部位に痛みを感じます。そのことで私たちは、「身体をこんなふうに固いものにぶつくと、こんなふうに痛いのだ」ということを学びます。これを私たちは、学問を通じて学ぶではありませんし、第一、このことは学問の理論では決して説明できません。科学が人体の仕組みをどこまで精密に解明したとしても、それはどこまでも「物」の仕組みにすぎず、「痛い」という「心」の現象はどこにも見つからないのですから。また、私たちは、固いものにぶつからないように適切に身体を動かすことも、また生活のなかで学びます。いったいどうやって私たちが身体を動かせるのか、これについても科学は何も教えてくれません。なるほど科学は、「脳」という「物」から「神経」という「物」を通じて何らかの「物理的」信号が「手」といった「物」に伝達されてそのことによ

て「手」が動く、といった物理的メカニズムについては語ってくれるのですが、手を動かそうとする私の「気持ち」や「意志」は、「物」ではなくて「心」の現象です。目に見えない「心」が身体という「物」に働きかけてこれを動かすこと、これは科学では決して解明できない謎ですが、私たちの生活においては、それは謎でも何でもない当たり前のことでしかありません。さらにまた、私たちは、自分の周りに存在する、自分の身体に似たある種の物、つまり他の人間の身体が、たんなる物体ではなくて、そこに「心」が宿っているということをも知りますが、それはどんな学問によるものでもなく、「日頃の交わり」、つまり、私が自分の身体で五感を用いて人々と触れ合い、語り合い、交流することによるものなのです。

デカルトはまた他のところで、「感覚」の働きが私たちの「健康の維持」にとって極めて重要であることも指摘しています。「感覚」によって私たちは、自分に苦痛を与えるものを避け、自分に快感を与えるものを求めるように導かれますが、苦痛を与えるものとは基本的には身体に有害なもの、快感を与えるものとは基本的には身体に有益なものなのです。デカルトの言葉を引きます。

感覚の知覚は本来、心を一部とする複合体〔＝心身合一の状態にある人間自身のこと〕において、何が好都合で何か不都合であるかを心に示すためにこそ自然によって与えられたものであり、そのかぎりでも十分に明瞭ではっきりしている〔…〕(デカルト『省察』第六省察)

このように見てくると、「物心二元論」という表看板の影に隠れたもう一つのデカルト哲学の構えが見えてきます。それは、たんなる「物」と「心」との対立関係のなかで動く思考ではなくて、「物心二元論」と「心身合一」との対立関係のなかで、言い換えれば「知性」が主導する「学問・理論」と「感覚」が主導する「生活・実践」との対立関係のなかで動く思考です。私は、おそらくこの後者のなかにこそ、現代の私たちが抱えている諸困

難の根とその解決へのヒントがあるのだと考えます。最終節となる次の節では、この問題の大まかな構図を、特に現代における「管理社会」の問題に焦点を合わせる仕方で提示した上で、これを現在のコロナ禍の状況と重ね合わせてみたいと思います。

4. 管理社会の問題とコロナ禍の世界

「知性」が主導する「学問・理論」と「感覚」が主導する「生活・実践」との対立関係のなかで動く思考、といま述べましたが、ここで「学問・理論」と言うとき、私たちににとって目立って重要な意味を持つのはいわゆる「科学」です。というのも、近代的な「知性」は、「主観」としての自分の身分は不問に付して、一切を最終的に数理的に理解可能なものとして「客観化」することへと向かおうとするからで、そこで構築される知がまさに一般にそう呼ばれる「科学」だからです。「科学」とそれを主導する「知性」は、あらゆる「主観」を拭い去った「客観性」についてのある種冷徹な認識を可能にする一方で、ともすれば、「知性」自身が本来はそこに位置する「主観性」と一緒に、主体がそのうちにこそ存在する「生活」をも忘れ、つまるところ、生きている私たち自身の現実そのものを忘却する傾向を自ずと持ちます。

現代の諸問題の多くは、「学問・理論」と「生活・実践」との対立関係、乖離して互いを排除しあいながらも絡み合う複雑な諸関係に由来するものと見ることができます。

それら諸問題のうち、環境問題はわかりやすい例でしょう。「科学」は、「物」としての自然を解明して、それを都合よく改変して利用する技術を人間にもたらします。その技術は、本来は人間の「生活」を良くするためにこそ望まれたはずではあったのですが、環境のなかで多様なものたちと共に生きている人間の現実全体を十分に考慮に入れることがなされないまま、歪な社会構造や権力関係のなかで一部の人間たちの偏った意図や欲望に駆動されて——あるいはまたしばしばそうした意図や欲望をも離れて「一人歩き」する仕方で—

一機能した結果、多くの人間の安定した生存を脅かすような自然環境や社会環境の破壊をもたらすに至っています。

ただここでは環境問題は措いて、特に管理社会（ないし情報管理社会）の問題に目を注ぎたいと思います。それは、人間を客観的なデータに従って効率的に管理しようとする社会の問題であり、それは、私たちの社会の現実的な在り方として、特にこのコロナ禍において際立ったものになってきています。またこの問題は、一見そうは見えなくとも、実は環境問題以上に大きくまた根本的な問題だとも言えます。なぜなら、環境問題とは、人間が自然を「管理」しようとすることの失敗をめぐる問題だと言える一方で、管理社会の問題とは、管理される自然のなかに、より包括的に、当の人間自身もが含まれたときの問題だとも言えるからです。「科学」や一般に近代以降の「学問・理論」は、生きて生活する人間を、「物」と同様に客観化した上で情報化・数量化して捉え、アーティフィシアルな知性（AI）にある種の頂点を見る何らかの「知性」による計算のもとで合理的に「管理」することを可能にします。そうした「管理」の体制は、一般に人間が集団で暮らしていくときにどうしても必要となってくる組織や秩序の維持・発展のためにきわめて有益な面をももちろん持つではありますが、一方では、人間集団のなかに様々な限定や区別・分類を設定する傾向（差別や格差をもたらす仕組み）があると共に、他方では、そうした限定や区別を越えた平等性を敷設する場合でさえも、一人ひとりの生きた人間の具体的生活を十分に尊重することには必ずしも至らず、何がしか非人間的な相貌を持つものにならざるをえません。

厄介なのは、生活する私たち自身が、そうした「科学」や「理論」の有効性を漠然とではあれ大勢において認め、自分自身を自分自身による統御以上に外からの管理に積極的に委ねることへと自ずと傾かざるをえない、ということです。というのも、私たち自身がすでに既存の組織・秩序のなかに置かれ、これに従ってしか生活できないようになっており、しばしば無自覚なまま様々な「管

理」のもとでいわば「生きさせられる」ようにして生活しているところがあるからです。

例えば、ごく卑近な例として、多くの人々が毎年受けている「健康診断」を挙げることができます。自然界の野生動物のように生きるのではなく、人為的に様々につくりかえられた現実のなかで生き、そこで自己を形成していく私たちは、自分自身の健康維持に関して、デカルトが「心身合一」に関して述べていたような、自分自身の「感覚」の機能を頼りにする以上に、医学の知識と医療の技術とに支えられた客観的な判断と対策とに、身を委ねています。「健康診断」で得られる数値は、私たちの日頃の実感よりずっと「正確」なものに思われますし、おそらくは、それについての客観的な診断こそが、私たち自身では知ることができなかった私たちの心身の真実を教えてくれるのです。なるほど、毎年の「健康診断」は、一方では実は、学校や企業などの組織が、また延いては国全体が、そのメンバーを効果的に管理するための手段にほかなりません²⁾。けれども他方では、私たち自身の方で、それを自分自身の健康維持に役立つものとして肯定的に捉え、甘んじてそれに身を委ねてもいるのです。

実際、「生活」における「感覚」がどれほど信頼できると言うのでしょうか。「感覚」に従って健康に悪いものを食べ過ぎて病気になってしまう無知な私たちに、説得的な数値でもって節食・摂生のアドバイスを与えてくれるのは現代医学なのではないでしょうか。新型コロナウイルスを「感覚」で捉えることなどできません。それは目にも見えず、不織布の目をもすり抜けて、感知しがたい「霧」を通じて、人から人へと伝染します。実際、「感覚」に一定の信頼を与えていたデカルト自身も、最終的には、科学こそが私たちの健康維持を完全なものにしてくれるという結論に至っています。

デカルトは、私たちの「感覚」が、その能力の不完全さゆえにしばしば私たちの健康について誤った判断をさせる危険性を持つことに注意を促す一方で、科学（デカルト当時の言葉では「自然学」）の効用について、次のように語っています。

それら〔＝私が獲得した自然学の考え方〕が私に教えてくれたところでは、生にきわめて有用な諸々の認識に達することが可能であり、学校で教わる思弁の学問ではない実践的学問を見いだすことができるのであって、われわれはこの学問を通じて、火や水や空気や星々やその他われわれをとりまく物体の力や作用を、職人の様々な技能を知るようにしてはっきりと認識することによって、それらに特有のあらゆる用途に同様の仕方を用いることができるようになり、かくしてわれわれは、自然界の主人かつ所有者となることができるのである。このことは、たんに、地上の果実とあらゆる便宜を容易にわれわれに享受させてくれるような無数の技術の発明という点に関してのみならず、また主として、健康の維持という点に関しても望ましいことである。健康の維持は、うたがいのなく第一の善であり、この生の他のあらゆる善の基礎である。というのは精神ですら、体質や身体諸器官の状態にきわめて強く依存しているので、人間一般をこれまで以上に賢明かつ有能たらしめる手段というものがもしあるとすれば、それは医学にこそ求められるべきだと私は信じるからである。（デカルト『方法叙説』第6部）

ここには、人間自身をも含めて自然界の全体を自らの知と力とのものに収めようとした近代科学の野心のすべてが表現されています。そしてこの野心はたしかに、近代医学の恩恵に多少とも浴したことのある誰しもがまずは素直に認めるであろうように、近代以降を生きる私たちにある種の幸福をもたらしたとすることができるでしょう。

けれども他方、このような体制、つまり、私たちが、「感覚」が主導する自分たちの「生活・実践」を、自分たちから離れたところで何らかの「知性」が主導する「学問・理論」に、半強制的・半自発的に委ねさせられる体制は、私たちの生の、私たち自身のものとしての性格を、私たち自身にも気づかれないまま、深刻に損なってしまうものでもあります。実際私たちは、自分自身で自分の

生に判断を下すということをやめ、先にも触れたように、ただ周囲から生きさせられるままに生きるだけになってしまっている、という面が多少ともあるのではないのでしょうか。

二十世紀のフランスの特異な哲学者、ミシェル・フーコー (Michel Foucault, 1926-84) は、デカルトの生きた十七世紀以降、このような社会の体制を次第に強化していった西洋の「政治」の支配的な在り方を「生政治 (bio-politics)」と名づけ、そこで働く力を「生権力 (bio-power)」と呼んでいます (フーコー『性の歴史 I 知への意志』他)³⁾。「生政治」とは、共同体を支える個々の成員の「生」を、基準となる一定の「理論」のもとに従わせ、これを通じて維持・管理し、そのことで共同体自身を存続・発展させようとする、そのような意図的・非意図的な戦略であり、「生権力」とは、何らかの権力者の力と言うに限らず、そのような戦略のもとで作用する諸々の力のことです。このような体制のもとで生きる私たちは、一方では、この体制によって生命を維持させられながら、他方では、自分自身の主体的な生を何がしか放棄させられています。それは、個々人の生存と生活との細部にまで管理を及ぼそうとするような、管理社会の一つの徹底化です。

この度のパンデミックは、まさに各共同体の成員の生存をめぐる緊急事態として、このような「生政治」としての諸国の体制をかなりあからさまに露呈させることになった、とも言えます。日本では少なくとも表面上はそこまで極端なことにはなっていませんが、国によっては、新型ウイルスへの感染を予防し「国民の生命を守る」という大義のもと、国家による国民生活の強制的な制限や個人の日常的行動についての徹底的な情報収集が、強力に行われ、また行われつつあります。一方で、このような施策がまさにその建前通り人々の生命を守ることにたしかに繋がっていること、これは認めなければならないでしょう。また実際、そうであるがゆえに人々もそのような体制に従ってきているのだと言えます。けれども他方、この体制下で、私たちの生活の基本的な在り方、つまり自らの「感覚」に適切な信頼を置き、自らの判

断に基づいて行動し、自分自身の生き方のスタイルを築くこと、このことが、たんに損なわれているというのみならず私たち自身によっても放棄される傾向にある、ということにも、注意を払っておくべきではないのでしょうか。

デカルトは、エリザベート宛の手紙のなかで、「心身合一」を学ぶ場として、「生活」と並んで「日頃の交わり」をも挙げていましたが、このことの意味も小さくはありません。コロナ禍は、いわゆる「ソーシャル・ディスタンシング」の拒みがたい要請によって、この「日頃の交わり」を非常に困難なものにしています。美学者の伊藤亜紗 (1979-) は、「触れる」という、心身合一において生きる私たちの身体的な交わりが、私たちの生の根本的な「倫理」に関わることを指摘しながら、現在私たちが置かれている事態の意味を、端的に次のように表現しています。

新しい生活様式とは、他人の体をリスクとみなす生き方です。悲しいことに、いまや他人の体は自分の命を脅かすかもしれないというリスクの塊になり、自分の体もまた他人にとっての脅威になりうるという前提で生きていかなければなりません。(伊藤亜紗『手の倫理』講談社 2020 年, p.13)

他人の体が自分の体にとって、また自分の体が他人の体にとって脅威になりうること。ある意味では、これは、出会いが殺し合いの可能性を自ずと含んでいる以上、昔から変わらないことでもあります。けれども、根本的に異なるのは、その脅威が、出会い出会われる個々の人間の意図とは無関係に存在しているということ、そしてその脅威を避けるためには、私たちはどうしても、私たち個々人の感覚と判断を越えて、何らかの仕方ですの正しさが担保された「学問・理論」や「客観性」への慎重な参照・準拠を求めざるをえない、ということです。いま私たちは、共同体全体としての生命の安全と引き換えに、個々人との日常的な接触を制限され、また自粛しもし、やむをえない一種の諦めのなかで、包括的な分断・隔離を経

験しています。それが、私たちのこれまでの生き方の姿勢——「倫理」——をも、私たち自身の自覚や納得とは別のところで自ずと変質させてしまっている、それが現状かもしれません。

しかし、この困難な状況のなか、私たち自身の具体的な生、心身合一のありさまで生きている私たちの生がたしかにあります。それをどう私たち自身の手で維持し、場合によっては変容させながらも滅びさせはせず、継続していくのか。それが、この問題の一つの端緒をしるしづけたとも言えるデカルトの考えのなかにすでに示されていた、私たちの古くて新しい課題なのではないでしょうか。

終わりに

以上、「感染症と哲学」というテーマでお話ししました。「現代」の状況に話が戻ってくるまで、だいぶ遠回りした話だったかもしれませんね。私はまず、現在のコロナ禍をめぐる問題を、人間は身体を持つ、という普遍的事態に関わるものと捉えました。次に、この事態が私たちの時代においてどう理解されており、また理解されうるのか、これを探るために、この理解の基本的な枠組みを提示していると思われるデカルトの考え方を参照しました。デカルトには「物心二元論」の理論と「心身合一」の事実の確認があります。「物心二元論」は、近代哲学と近代科学の発展を導きましたが、「心身合一」の事実は、これらの「学問・理論」では解けない謎として、私たちの時代の諸困難の根底に残り続けました。現代の諸困難の由来は、「感覚」によって生きられる「心身合一」の個別的事実と、「知性」によって思考される「物心二元論」の一般理論との間の軋轢と複雑な絡み合いのなかに求められます。このような、理解の枠

組みを提示した上で、最後に、コロナ禍の現在に見て取られる具体的な問題、つまりフーコーが「生政治」という言葉で捉えようとした管理社会の現実を目を注ぎ、この枠組みのもとでその性格を素描しました。そのことで、私たちが現在抱えている困難と課題との基本的な輪郭が多少とも見えてきたのではないかと期待します。

一方に、私たちが信頼すべき、私たち自身であるような具体的で個別的な生があります。それは私たちにとって最も大切なものであり、私たちの一切ですらあります。けれども他方、その生は万能ではありえず、様々な弱さを抱え、自らの知の及ばない環境のなかで、他者や外部に依存してしか存続できません。このある意味では当たり前の、私たちの恒常的な状況、それが現在においては、私たちの生の存続の危機のなかで際立った仕方です。浮かび上がり、私たちに、自分自身の生の意味をあらためて問い直すことを強く促しているのだと、そう捉えることもできるでしょう。そう考えれば、現在の状況は、私たちが自分自身の生をより深く理解するための絶好のチャンスでもあるのかもしれません。

註

- 1) 本稿は、オンライン（オンデマンド式）で実施された2021年度成城大学共通教育科目「特別講座Ⅱ〈感染症と現代〉」（担当教員：有田英也教授）の第8回授業（担当講師：筆者）において受講者に提供された資料に、若干の修正を施したものである。
- 2) 例えばナチス・ドイツは、ガン研究に特別な力を注ぎ、禁煙運動や集団検診を推進するきわめて先進的な医療・健康政策を行っていた。ロバート・N. プロクター『健康帝国ナチス』（宮崎尊訳、草思社、2003年、原著 Robert N. Proctor, *The Nazi War on Cancer*, Princeton University Press, 1999）を参照。
- 3) コロナ禍の状況をフーコーの「生政治／生権力」の概念で読み解く企てはすでに多く試みられているが、この状況下で早期に出された読みやすいものとして、美馬達哉『感染症社会：アフターコロナの生政治』（人文書院、2020年）を挙げておく。